

3週間近くたったことともあ  
ラブッタまではヤンゴンから  
陸路で約13時間。道なき道を、総  
勢40人を乗せた9台の車両が列  
を成して進んでいく。被災から  
3週間近くたったことともあ

過酷な環境下で  
1200人以上を診療

26日に中心都市ヤンゴンに到  
着した一行。保健大臣と会談し  
たほか、国連機関やNGOなど  
から情報収集を行った。その中  
で、「高度な医療資機材を携行す  
る日本のチームには、被害の大  
さい地域に行つてほしいという  
話が保健大臣からありました」と  
調査チームの団長を務めた  
(財)救急振興財団の金井要医  
師。そして27日昼ごろ、ミャン  
マー政府から日本に正式に出され  
た支援要請。29日、日本航空(J  
AL)のチャーター便で成田空  
港を出発した医療チームは、デ  
ルタ地帯の最先端、ラブッタの  
避難民キャンプに向かった。

に限り、援助を受け入れること  
をミャンマー政府が表明したの  
だ。「ようやくチームを派遣する  
可能性が出てきた」(横井職員)。  
日本は、被災状況と支援ニーズ  
を確認すべく、翌25日に調査チ  
ームを派遣した。

しかし、「国際緊急援助隊  
(JDR)を派遣することはない  
だろうと考えていた」と話すの  
は、JDR事務局(当時)の横井  
博行職員。海外からの援助を受  
け入れれば、国内の状況がメデ  
イアなどを通じて世界中に伝わ  
る。軍事政権下にあるミャンマ  
ーにとってそれは好都合とはい  
えなかった。

被災から3週間後  
医療チーム派遣



一人でも多くの  
被災者を救いたい

2008年5月初旬、  
ミャンマー南部一帯に猛威を振るつた  
巨大サイクロン「ナルギス」。  
死者は未曾有の7万人以上。  
その最大の被災地ラブッタに、  
国際緊急援助隊(JDR)医療チームが向かった。

とところが5月24日、事態は急  
転。潘基文国連事務総長とミヤ  
ンマー代表の会談後、人道支援

(右上) 延べ1,200人以上を診察した医療  
チーム。外傷、感染症に次いで精神的な疾  
患も目立った  
(下) 沿岸地域を北上していったサイクロン  
「ナルギス」は、木々や家屋を次々になぎ倒  
し、港付近では船が陸に乗り上げた



り、車中から望む町は整然とし  
ていたかに見えた。しかし、約  
6400人が避難生活を送るキ  
ャンプには、診療を求めるたく  
さんの患者が待っていた。

目立ったのは、感染症による  
幼児の下痢や、皮膚疾患、精神的  
苦痛からくる体調不良などの症  
状。また、劣悪な環境の中でマ  
リアや結核の疑いがある患者も  
いた。「中には、木につかまって  
サイクロンをしのぎ、そのせい  
で手がしびれ、まひしてしまっ  
た男性もいた」と国立国際医療  
センターの園田美和看護師。聞  
けば、その男性の足には、彼の子  
どもが必死にしがみついていた  
という。サイクロンのすさまじ  
さがうかがい知れる。

9日間の活動で、延べ120  
2人を診療した医療チーム。乾  
期と雨期の境で、気温が40℃近

い日もあれば、湿度が100%  
に達しテント内が蒸し風呂状態  
になる日もあった。これが3度  
目のJDR派遣となった金井医  
師も「今回は体力的にもきつか  
った」と話す。

そんな過酷な環境にあつて  
も、一人でも多くの患者さんを  
救いたい一心で、隊員は力を振  
り絞る。「被災者は私たち以上に  
つらいはず。もつと何かしたい  
と思った」。そう話す園田看護師  
は、医師の補助・介助やトリア  
ージなど看護師としての通常の  
活動以外にも、検査技師らとと  
もに下痢の原因と考えられた池  
の水の水質検査や、手洗いなど  
の公衆衛生活動を、休憩時間を  
使い自主的に行つた。

サイクロンは局地的な地震と  
違い、広範囲に被害をもたらす。  
今回、被災地であるラブッタ周

辺にも被害は広がっており、現  
地での食料調達には困難が予想さ  
れていた。そこで、通常(3日分)  
の1.5倍の量を日本から持参、  
ヤンゴンで3日分を購入。さら  
にこうした事情を知つたJAL  
からは、機内に積んでいた食料  
などの提供があつた。隊員が体  
調を崩せば、被災者を助けるこ  
とさえできない。

未曾有の災害から1年余り。  
その後JICAは、ミャンマー  
で復旧・復興支援へと協力の形  
をシフトし、被災地域の水運の  
再建を進め、さらに小学校を兼  
ねたサイクロンシェルターの設  
置や農業基盤の整備などに協力  
する予定になっている。

被災者が被災者でなくなる日  
まで――JDRは、被災者が通  
常の生活を取り戻すために重要  
な役割を担っている。



(上) 屋外の待合室で順番を待つ被災者。JDR  
の診療を求め、連日たくさんの人々が列を作つた  
(中) 今回初めてJDRに参加した園田看護師。  
夫と子をつ失った女性に、「それでも日本人の先  
生に診てもらえてよかった」と声を掛けられたこ  
とが、悔しくもうれしかったという  
(下) 調査チームに引き続き、医療チームの団長  
も務めた金井医師。活動最終日、報告書をラ  
ブッタ地区の保健担当官に手渡し、JDRの任務  
は終了した

JALから提供された物資は、  
水やジュース、インスタントラ  
メン、子ども用のおもちゃ、おむ  
つ、トイレトペーパーなど

